

360°

フォトジャーナリスト

宇田 有三



小雨降る中、病院前に二民主主義を求める抵抗運動十数人の人がたたずんでいた。手には小さなプラカード。写真や花束を持つ者もいる。入院中のアウンサン・スー・チーさんを気遣う人びとだ。当然、私服の秘密警察に囲まれている。彼らにとつては、命がけの行動だ。

サーチャーバー

「ドクツ、ドクツ、ドクツ」

シャッターを切りながら、心臓の鼓動で胸が張り裂けそうになる。外国の報道関係者は誰もいない。彼らの姿を撮っているのは今、世界で自分一人。そう思うと、緊張で胃が引きつる。

南アジアの西端に位置する「ビルマ」に滞在した。今この国へ通い始めて二年。最も長い取材で、一度に約三カ月半くらい滞在したこともある。だがこの数年、短期間の取材に行き詰まりを感じてきた。何が伝えられて、何が忘れられて

多くは隣国タイから発信された。この国へ通い始めて二年。最も長い取材で、一度に約三カ月半くらい滞在したこともある。だがこの数年、短期間の取材に行き詰まりを感じてきた。何が伝えられて、何が忘れられて

を写真に記録しよう。そう思い立った。

うだ・ゆうぞう 1963年、神戸市生まれ。教職を経て、米国外で写真を学ぶ。アジア、中米などで、軍事政権下の人々と難民、貧困に焦点を当てて取材を続けている。2002年、黒田清記念JCJ新人賞を受賞。神戸市在住。



「この国の実状が報道されることはない。日本の新聞社の特派員は、ビルマに常駐していない。記事の検。これまで伝えられてこ

なかった普通の人のびとの姿を写真に記録しよう。そう思い立った。

取材制限の厳しいビルマでは、普通の人の本音を聞